

総合的な学習の時間におけるキャリア教育 —キャリアプランニングと困難を乗り越えるスキルに着目して—

教職実践専攻・ミドルリーダー養成コース
学籍番号 17GP402 氏名 大里 智子

1 問題と目的

本研究は、キャリア教育の基礎的・汎用的能力を構成する4つの能力の中のキャリアプランニング能力の向上を目指し、キャリアプランニングの体験的活動と、職業生活上の困難を乗り越えるスキルについて考える活動を取り入れたキャリア教育を、総合的な学習の時間を活用して実践し、その効果について探ることを目的とする。

現行の高等学校学習指導要領第1章総則第5款において「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること」が教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項として挙げられている。第4章で総合的な学習の時間（以下、総学とする）は「学習活動については、（中略）横断的・総合的な課題についての学習活動、生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について知識や技能の深化、総合化を図る学習活動、自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動などを行うこと」とされている。学校から社会への移行と適応への支援は、学校教育に不可欠なものであり、総学の目標はキャリア教育と深く関わっているといえる。

また、「高等学校キャリア教育の手引き」（文部科学省，2011）では、高等学校普通科でのキャリア教育の充実が課題であると指摘している。全日制普通科の本校においてその課題は現実に存在する。本校は大学進学から就職まで生徒の進路が多岐にわたる。就職希望者が一定数おり、職業と直結する実学系学校への進学を選択する生徒も多いが、職業について考える時間が十分用意されているとはいえず、就職・進学後に進路変更に悩む卒業生も存在する。このような生徒の状況は、生徒が自己の生き方を考え、主体的に進路を選択できるようにさせるための、計画的・組織的なキャリア教育が十分でないことに起因すると思われる。キャリア教育の基礎的・汎用的能力の中でも、主体的に判断してキャリアを形成していく力であるキャリアプランニング能力の育成に力を入れる必要があると考える。

昨年度、本校で教員のグループワークが行われ、「育てたい力・優先して取り組むべきこと・こんな学校だったら」という3つの項目で意見交流を図った。主な意見の集約により、本年度の教育活動の方向性を、「主体的学習・部活動・ボランティア活動を中核に、生徒の多面的な成長を促し、自立心を育む」とし、重点目標として育てる力を「能動的に学ぶ力」と「主体的に行動する力」とした。国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2016）による、キャリアプランニング能力が高められることと、学校生活や将来のビジョンに対してもポジティブであることが直接的に関わっているという分析をふまえると、本校が重点目標とした「能動的に学ぶ力」と「主体的に行動する力」の育成と、キャリアプランニング能力の育成を目指すことには関わりがあるといえる。

さらに、児美川（2013）でも指摘されているように、情報化・グローバル化が進み、就

業・雇用を取り巻く環境が激変している現代において、働くことが一つの企業等の中で単線的に進むものではなくなりつつあり、社会に出た後には多くの岐路に立たされ、対処を迫られる困難も立ちはだかると考えられる。キャリアプランニングしていく上で、安定した職業や正規雇用を目指すことのみを視点を置くのではなく、転職等を含めてキャリアアップしてゆくという視点や、職業生活上で起こりうる困難を乗り越えるといった視点が必要である。「再分析から見えるキャリア教育の可能性」(国立教育政策研究所, 2016)においても、「卒業後に待ち受けている予期せぬ困難に対処するための方法を、キャリア教育を通じて学習することは極めて重要な意義をもっている」とまとめられている。

そこで、本研究では、キャリアプランニング能力の向上を目指し、キャリアプランニングの体験的活動と、職業生活上の困難を乗り越えるスキルについて考える活動を取り入れたキャリア教育を総学で実践し、その効果について探ることを目的とした。

2 方法

(1) 総学におけるキャリア教育の構造化

本校の学校経営計画の重点目標にはキャリア教育の推進が掲げられ、進路指導計画に基づき、総学を活用しながら外部講師による講演会や高大連携事業、インターンシップ等が実施されてきた。しかし、3年間で段階的にどのような力を育てるか、そのために何が実施されているかといった構造が見えづらい状況にある。また、各学習活動における事前学習や学びの振り返りが十分でなく、学びの蓄積・評価における改善が必要であり、学年団主導で1学年時に行われている職場見学や職業調べと、進路指導部主導で2学年時に行われているインターンシップとのつながりが明確でない。くわえて、どの学年でもキャリア教育を総学の柱にするという意識があるものの、3年間を通して生徒に身につけさせたい力に対し、どのように総学を活用していくべきかといった、話し合いや共有、総学の計画に対するキャリア教育の視点での練り合いが十分とはいえない。時間割上では全教員が総学を担当するように組まれているものの、実際には担任団のみで計画から実施まで取り組むことが多く、そのことが、総学やキャリア教育に対する認識と取り組み姿勢のばらつきにもつながっている。

そこでまずは、総学を用いて従来から実施されてきた学習内容をふまえながら、本校の総学におけるキャリア教育について、構造化を試みた。3年間の段階的な目標を考え、キャリアプランニングの体験的活動と、職業生活上の困難を乗り越えるスキルについて考える活動を取り入れ、学習効果の高まりを促すために、学びの記録を行わせることを含めて構造化した(表1)。

表1 総学におけるキャリア教育の構造化

3学年 未来への接続	○進路研究	○キャリアプランニング	○事例を用いた将来の困難対応検討	○3年間ポートフォリオ作成
2学年 理解・行動の拡張	○3年生体験発表会 ○上級学校見学 ○インターンシップ	○進路探究活動 ○同窓生講話 ○未来予想グラフ	○相談機関探索 ○困難対応検討	○学びの記録(計画修正)
1学年 自己・他者の理解	○進路ガイダンス ○高大連携事業 ○キャリアサポ	○高校生活プランニング ○キャリアアップを知る ○職業人講話	○困難対応の自己分析	○学びの記録(計画作成)
実施内容の分類	従来から実施してきた学習	キャリアプランニング	困難を乗り越えるスキル	学びの記録

(2) 指導計画の作成

総学におけるキャリア教育の構造化(表1)をもとに、本年度担当することになった2学年の総学におけるキャリア教育に関する授業の指導計画(表2)を作成した。本年度の前半期の総学で、キャリアプランニングの体験的活動として「進路探究活動」を、職業生活上の困難を乗り越えるスキルについて考える活動として「困難を乗り越えるスキル」の授業を実施することとし、各学習活動につながりが生まれるよう、事前学習や学びの振り返り・評価等を配置した計画を作成した。

①進路探究活動について

進路探究活動では、事前学習・計画・実践・振り返り・評価という体験的活動を通して、キャリアプランニング能力の要素である、学ぶことの役割の理解・将来設計・選択・行動・評価する力を身に付けることを期待した。例年、2学年生徒に対して参加を促しているオープンキャンパスやインターンシップを、単発のものにせず、自己の進路探究として位置づけ、そこへ向かう事前学習が、年間目標や未来予想人生グラフ、同窓生講演会であるという意味を持たせた。同窓会講演会の講演者には、講演を聴くことで、生徒が自分の未来を具体的に想像して、キャリアプランニングする足がかりができるよう、講演者自身が高校を卒業してからの10年間に経験した、志望校選択や浪人生活、進学・就職・転職といった転機において、どのように意思決定したか語ってもらえるよう依頼した。

また、進路探究活動の計画においては、オープンキャンパス、インターンシップだけで

表2 指導計画

進路探究活動	事前学習	1	年間目標を考える	個人毎に学習・生活・部活や趣味について年間目標を立て、ペアワークで意見交換し、目標をより具体的に改善する
		2	未来予想人生グラフ	人生グラフを描き、自分の未来を想像する
		3	同窓会講演会	卒業後10年間の受験・大学進学・就職・転職という同窓生のキャリアに関する講演を聞き、自分の10年を考える
	計画	4	進路探究活動の計画	自己の進路について収集すべき情報や体験したい活動を考え、活動計画を作成する
		5	計画の発表・意見交換	活動計画をグループ内で発表することで、実践する意欲を高め、意見交換を元に計画の不足部分を補う
	実践	6	計画の実践	夏季休業等を活用し計画を実践する
	振り返り	7	活動の振り返り	自己の計画・実践における課題を見つけながら、次週の報告会に向けて発表資料を作成する
		8	活動の報告会	発表資料を元に実践についてグループ内で発表し、質問に答えたり、助言してもらったり、他人の発表を聞いたりすることで、実践の振り返りを深める
	評価	9	自己評価	一連の活動を振り返り自己評価し、学んだことを生かして、春先に作成した1年間の目標や未来予想人生グラフなどのプランを再構築する
困難を乗り越えるスキル	10	高校生活の困難	困難への対応をシミュレーションし、コーピングについて知ることで、どう思考・行動するか考える力を身につける	
	11	社会生活の困難	困難に直面したときに自分から相談しようという姿勢を身につけ、公的な相談機関を利用して解決する方法を知る	

なく、ボランティア活動や、アルバイト、読書などを例示し、どんな活動も自分の可能性を広げるものであると意味づけできるように示唆した。また、各自が進路探究活動として計画した内容を実施前にグループ内発表することで、現実に行う意欲を高め、意見交換を元に計画の不足部分を補うことを期待した。活動後は実践の振り返りを深めさせたいと考え、報告会を行うこととした。

②困難を乗り越えるスキルについて

自己のキャリアを形成していくにあたり遭遇すると予想される困難に対し、生徒自身がそれを乗り越えるための力や必要な知識を身に付け、抱えている多くの悩みやストレスへの対応力も高めることを期待して実施することとした。高校生活の困難、社会生活の困難と段階を設け、困難例への対処についてK J法を用いて話し合いを行わせ、コーピングや主な相談機関を紹介した後に、話し合いの振り返りをさせるという流れの授業を計画した。

(3) 実践の効果を測るためのアンケートの作成

本実践の効果を測るために、キャリア教育の基礎的・汎用的能力に関するアンケートを作成し、実践の前後でアンケート調査を実施することとした。アンケート項目は、「高等学

表3 アンケート項目

項目内容
1.他者(友人やクラスメイト、家の人など)の意見を聞くときに、相手の立場を考慮している a
2.他者に自分の気持ちや考えを話すとき、相手が理解しやすいよう工夫して伝えようとしている a
3.何かをするときに、評価・改善を加えながら実行している c
4.信憑性が高くかつ必要な情報を取捨選択しながら活用している c
5.働くことの意義について自分の考えを持っている d
6.自分がすべきことがあるとき、自分の行動を適切に律し、取り組んでいる b
7.学ぶことの意義について自分の考えを持っている b
8.自分の良いところを伸ばし、悪いところを克服しようとしている b
9.何か問題が起きたとき、課題を発見し解決のために工夫をしている c
10.目標に対し、実現のための方法について考えている c
11.目標に対して起こした行動を、振り返って改善している c
12.様々な働き方や生き方があることを理解している d
13.何かをするときに、見通しをもって計画してから実行している c
14.不得意なことでも、進んで取り組もうとする b
15.何か問題が起きたとき、原因を調べている c
16.指示がなくてもやるべきことを見つけて取り組んでいる b
17.他者と何かをするとき、自分がどのような役割や仕事を果たすべきか考えている a
18.他者の意見を聞くときに、相手の気持ちや考えを受け止めようとしている a
19.他者と何かをするとき、役割や仕事を分担しようとしている a
20.自己の良いところ悪いところを把握している b
21.他者に自分の気持ちや考えを話すとき、自分の気持ちや考えを整理してから話している a
22.他者と何かをするとき、力を合わせて行動しようとしている a
23.学校で学んでいることと自分の将来のつながりを考えている d
24.社会の現実を視野におさめながら自分の将来を考えようとしている d
25.調べたいことがあるとき、自ら進んで情報や資料を収集している c
26.自らの将来について具体的な目標を立てている d
27.目標に対し、実現のための具体的な行動を起こしている c
28.他者に自分の気持ちや考えを話すとき、相手の立場を考慮している a
29.自分がすべきことがあるとき、喜怒哀楽の感情に流されず、取り組もうとしている b

校キャリア教育の手引き」(文部科学省, 2011)にあるキャリア教育の基礎的・汎用的能力の実態調査のためのキャリア教育アンケートの一例をもとに, 一項目が一要素になるよう細分して作成した。それらの項目を2学年の主任と担任の教員6名によって, 基礎的・汎用的能力を構成する4つの能力に分類を行い, 暫定尺度が作成された。分類は, a:人間関係形成・社会形成能力, b:自己理解・自己管理能力, c:課題対応能力, d:キャリアプランニング能力として記載している(表3)。

回答は「当てはまる」を4, 「やや当てはまる」を3, 「やや当てはまらない」を2, 「当てはまらない」を1とする4件法で求めることとした。アンケート調査は対象を2学年生徒237名とし, 授業開始時の5月と終了後の10月の2回実施することとした。

(4) 実践前の手続き

①授業指導案の作成と実施前検討

毎回の総学について授業指導案とワークシート案を作成し, 担任団に事前配布して目を通してもらい, 週一回の学年会議で実際の授業進行を簡単にシミュレーションしながら, グループワークの話し合い項目やワークシートの内容を改良してから実施することとした。各授業における目的を指導案に記載し, 共通理解して授業に取り組めるよう, 直前の打ち合わせでも確認するようにした。また, 授業指導案とワークシートは副担任と学年付き教員にも事前に配布し, 授業への参加支援をお願いした。

②ペア・グループワークの実施と発表機会の設定

授業ではペアやグループでの話し合いの機会を多く設けた。また, ペアやグループでの話し合いをまとめてクラス全体に対して発表する機会や, 個人のまとめを報告発表する機会を設けた。他者に伝えるために自分の考えをまとめることで整理できたり, 他者の意見を聞くことで, 自他の違いに気付くとともに, 自分の考えを広げたり深めたりすることを期待した。

③ワークシートの工夫

毎時間のワークシートには, 授業の目標を記載し, リフレクション記入欄を設けた。生徒自身が目標を把握して活動に取り組み, 時間の終わりにリフレクションを記録することで, 自己評価し, 自身の課題を把握できるようにした。ワークシートの蓄積が学びの記録になることを期待した。また, ワークシートを回収してリフレクションを点検し, 記入内容から授業の成果を見取ることも目的とした。

3 結果

(1) 主な授業実践における取り組みの状況について

①第1回の授業

1	年間目標を考える	個人毎に学習・生活・部活や趣味について年間目標を立て, ペアワークで意見交換し, 目標をより具体的に改善する
---	----------	--

この回では, 年間目標を①学習面, ②生活面, ③部活や趣味などチャレンジしたいこと, の3項目で考えさせた。ワークシートに目標とその達成のためにどう取り組むかを書き, ペアで互いのワークシートを読んで質問し合わせた。年度始のクラス替え間もない時期であったこともあり, 互いに一生懸命伝えようとする生徒の姿が見られた。ワークシートのリフレクション欄には, 「話してみると楽しい」「質問を考えるのが難しい」「力を入れるところが人それぞれで面白かった」「進路希望先を定めたい」「とりあえず計画を立ててみると気分が変わって目標に近づけるかもしれないと思った」「質問に答える中で目標が曖昧だったことに気づいた」といった内容が書かれていた。

②第5回の授業

5	計画の発表・意見交換	グループ内で発表することで、現実に行う意欲を高め、意見交換を元に計画の不足部分を補う
---	------------	--

この回では、夏季休業等を活用した進路探究活動の計画を5人グループの中で発表し合わせた。進行・記録・計時等の役割を決めさせ、発表2分の後、聞き手から発表に対して意見を出すという流れで進めた。リフレクション欄には、「他者が計画していることを自分もやってみたい」「自分もこうすればいいんだと思うことがたくさんあり聞いて良かった」「皆将来に向かって考えていて焦りを感じた」という内容が多くあった。実施後に担任団から、「時間配分を変えて実施してみた」「ワークシートの記入がすべて終わらなかった」などの意見を収集した。

③第7回の授業

7	活動の振り返り	自己の計画・実行における課題を見つけながら、次週の発表の資料を作成する
---	---------	-------------------------------------

夏季休業等を活用して実践した進路探究活動について振り返り、その内容を次週発表できるように発表用資料を作成させた。当初は自由に資料を作成させる予定で考えていたが、これまでの生徒の様子から書き込み型のワークシートの方がよいらろうと判断し、ワークシートを発表用資料とすることにした。また、ワークシートにどう書けばよいかわからない生徒への支援としてうろうろタイム10分を設けた。計画した活動に取り組めなかった生徒がいることを予測して別のワークシートを準備し該当する生徒に使用させた。

リフレクションには「夏休み中にいろいろな活動をして自分のためになったことが多く、たくさん活動していくことは大事だと思った」「計画すると物事がスムーズに進むと実感した」「思っていたより中身の濃い看護体験ができ、看護師になりたい思いが強くなった」というポジティブな内容以外に、「計画・実行とも取り組みが遅かった」「部活でオープンキャンパスに参加できなかった」「学校見学で質問ができなくてそれ以上の情報を得ることができずもったいないと思った」などの課題も書かれていた。

④第8回の授業

8	活動の報告会	発表資料を元に実践についてグループ内で発表し、質問に答えたり、助言してもらったり、他人の発表を聞いたりすることで、実践の振り返りを深める
---	--------	--

この回は、事前の学年会議で、これまでの数回の授業でクラス内のグループワークがマンネリ化しているという情報があったため、進路探究活動の報告会はクラスを超えてグループを作り、体育館で一斉実施することにした。その際に、実施規模が大きくなるため、各グループの話し合いの見取りを、副担任・学年付きの教員にも協力してもらった。実施後には参加した教員から「互いの声が聞きとれないほど小さい声の生徒もいた」「内容を深めるためには司会の役割が重要だと感じた」「徐々に進行役が上手くなっていた」「会場が大きすぎて体育館後方のグループには指示が伝わっていない、教室の方がよい」などといった、情報や意見を収集することができた。

生徒のリフレクションで最も多かったのは「コミュニケーション力を高められた」という内容であった。他に、「質問してもらって自分に興味を持ってもらえてうれしかった」「他の人が自分にはできないようなことをやっていてすごいと思った」「質問してもらって改めて自分の体験を振り返ることができた」「相手が言いたいことを整理して、どんな質問すべきか考えるのが難しかった」など様々な気付きが書かれていた。

⑤第10回の授業

10	高校生活の困難	困難への対応をシミュレーションし、コーピングについて知ること、どう思考・行動するか考える力を身につける
----	---------	---

この回では、事前の学年会議で、グループ毎にテーマを一つ自分たちで考えさせ話し合いをさせるという案を提示したところ、テーマを一から考えさせるのではなく困難例をいくつか示した方が話し合いやすいだろうという提案が出された。そこで本校の生徒の実態を考慮して、困難例を勉強・部活・学校行事・家庭・友人関係に関わるものに決めた。表4はその授業の指導案の概略である。

リフレクション欄には、「自分にはない視点に気づけた」「シミュレーションしていくうちに自分の課題に気づいた」「今までさりげなくストレスへの対処を考えていたけどこうして柔軟に考えてみると自分が思わなかったことも出てきてそれを実行しようと思った」「相談することも大切」「問題が起きていろいろな考えを持って対処していきたい」「今後は相手のことも考えて行動していきたい」「他のグループとの共有では自分達では出なかった意見があった」などの言葉が書かれていた。また、ここまで行ってきたグループワークの中で、最も生徒達の話し合う声が大きく、活発に取り組んでいる姿が見られた。

⑥第11回の授業

11	社会生活の困難	困難に直面したときに自分から相談しようという姿勢を身につけ、公的な相談機関を利用して解決する方法も知る
----	---------	---

授業の流れを前回と同様にし、テーマは仕事をやめたい・同僚とうまくいかない・ハラスメント・残業が多すぎるなどから一つテーマを決めさせ話し合いをさせた。リフレクションには「今回のテーマでは自分一人でなく周りの人や機関に相談するのが大切だと思った」「相談機関に相談するという発想がなかった」「自分で抱えられなくなったら周りの人に助けを求めてもいいんだと気づけた」などの気づきや、「前よりスムーズにシミュレーションできた」「他の人の意見を聞いて考える力が身についた」「意見を共有する力が身についた」といった自己評価が書かれていた。

表4 「高校生活の困難」の授業指導案の概略

授業の流れ	教師の活動	生徒の活動	時間
1. グループ作り	役割分担を指示する	グループを作り役割分担を決める	5分
2. 流れを確認	活動の流れについて説明する	流れを理解する	5分
3. シミュレーション	グループ毎に、選んだ困難例に対する思考・行動をシミュレーションさせる	個人思考:自分ならどんな思考や行動をするか5つ考え、付箋に書く	5分
		話し合い:付箋の考えを出し合い、話し合っただけのものをまとめネーミングする	10分
	困難例 学習内容を理解できない、成績低下、部活をやめたい、友人と仲違い、志望進路が決められない、文化祭の準備が間に合わないなど。	【進行者が指図しながら進める】 【記録者は太ペンで囲みや文字を書く】 話し合った内容をまとめ発表の準備をする	5分
4. 他グループとの共有	2つのグループで輪を作らせ、発表役に発表を指示する	他グループとの共有 【発表者が発表し、他はメモをとる】	5分
5. コーピングを知る	コーピングの資料を用いて説明し、話し合いを振り返らせる	問題焦点型・情動焦点型の別について知り、分類しながら話し合いを振り返る。	10分
6. 振り返り	リフレクションを記入させる	リフレクションの記入	5分

(2) アンケートの因子分析

2 学年の生徒 237 名に対して 5 月と 10 月の 2 回実施し、得られた回答のうち、欠損値を含んだ 20 名を除いた 217 名分の回答を分析に用いた。基礎的・汎用的能力を構成する 4 つの能力は包括的な能力概念であり、それぞれの学校の課題を踏まえて具体の能力を設定し達成することが望まれるとされている（中央教育審議会，2011）。そこで、作成した 29 項目の得点について最尤法，プロマックス回転による因子分析を行った。最終的に 3 因子構造を採用するのが妥当であると判断した。

各因子は基礎的・汎用的能力を構成する 4 つの能力を活用しつつ命名した。第 I 因子は項目の内容が、自己を律し主体的に課題解決に向かう状態を表すものであることから、「自己管理・課題対応能力」の因子と命名した。第 II 因子は、多様な他者の考えや立場を理解し協働していくことを表す内容であるため、「人間関係形成・社会形成能力」の因子と命名した。第 III 因子は主体的に判断してキャリアを形成していくことに関わる内容であるため、「キャリアプランニング能力」と命名した。尺度の信頼性の指標として Cronbach の α 係数を用い、各下位尺度の内的整合性を検討した結果、.832-.880 と十分な値であり、各下位尺度項目は一貫性の高い項目によって構成されていることが示された（表 5）。

表 5 キャリア教育における基礎的・汎用的能力の尺度

尺度項目	I	II	III
I 自己管理・課題対応能力 ($\alpha = .880$)			
14.不得意なことでも、進んで取り組もうとする	.811	-.122	.064
11.目標に対して起こした行動を、振り返って改善している	.689	.013	.034
3.何かをするときに、評価・改善を加えながら実行している	.641	.086	-.022
9.何か問題が起きたとき、課題を発見し解決のために工夫をしている	.585	.181	-.051
8.自分の良いところを伸ばし、悪いところを克服しようとしている	.584	.230	-.110
4.信憑性が高くかつ必要な情報を取捨選択しながら活用している	.548	-.061	.111
13.何かをするときに、見通しをもって計画してから実行している	.536	-.066	.221
15.何か問題が起きたとき、原因を調べている	.515	-.003	.081
7.学ぶことの意義について自分の考えを持っている	.488	.036	.202
16.指示がなくてもやるべきことを見つけて取り組んでいる	.447	.075	.160
II 人間関係形成・社会形成能力 ($\alpha = .860$)			
18.他者の意見を聞くときに、相手の気持ちや考えを受け止めようとしている	-.130	.785	.024
28.他者に自分の気持ちや考えを話すとき、相手の立場を考慮している	-.125	.735	.136
22.他者と何かをするとき、力を合わせて行動しようとしている	-.062	.703	.100
19.他者と何かをするとき、役割や仕事を分担しようとしている	.060	.646	.025
1.他者(友人やクラスメイト、家の人など)の意見を聞くときに、相手の立場を考慮している	.298	.603	-.318
21.他者に自分の気持ちや考えを話すとき、自分の気持ちや考えを整理してから話している	.135	.548	.024
17.他者と何かをするとき、自分がどのような役割や仕事を果たすべきか考えている	.213	.508	.016
III キャリアプランニング能力 ($\alpha = .832$)			
26.自らの将来について具体的な目標を立てている	.067	-.096	.781
27.目標に対し、実現のための具体的な行動を起こしている	.240	-.129	.729
25.調べたいことがあるとき、自ら進んで情報や資料を収集している	.006	.137	.564
24.社会の現実を視野におさめながら自分の将来を考えようとしている	-.077	.383	.521
23.学校で学んでいること自分の将来のつながりを考えている	.181	.173	.379
I	1	.647	.646
II	-	1	.509
III	-	-	1

(3) アンケート結果分析

キャリア教育の基礎的・汎用的能力の各下位尺度における、事前・事後の平均値の差について t 検定を行った(表 6)。その結果、I 自己管理・課題対応能力 ($t(216)=2.44, p<.05$)、II 人間関係形成・社会形成能力 ($t(216)=2.26, p<.05$)、III キャリアプランニング能力 ($t(215)=3.62, p<.01$) のそれぞれにおいて、事後が事前より有意に得点が高かった。

表 6 キャリア教育における基礎的・汎用的能力尺度 t 検定結果

	N	事前	事後	t 値	自由度
I 自己管理・課題対応能力	217	30.48 (5.41)	31.62 (5.07)	2.44 *	216
II 人間関係形成・社会形成能力	217	23.80 (3.44)	24.48 (3.04)	2.26 *	216
III キャリアプランニング能力	216	15.05 (3.30)	16.06 (2.90)	3.62 **	215

1) 上段は平均値、下段は標準偏差

2) * $p<.05$, ** $p<.01$

4 考察

(1) 尺度作成について

尺度作成の因子分析ではキャリア教育の基礎的・汎用的能力を構成する4つの能力分類である人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力のうち、自己理解・自己管理能力と課題対応能力が1つの因子となった。これは、課題解決に向け自分自身がどのように対応していくかという点において、自己理解・自己管理が伴うことが理由として考えられる。また、III キャリアプランニング能力因子では、キャリアプランニング能力に課題対応能力の項目が混在してしまった。この混在した2つの尺度項目「25. 調べたいことがあるとき、自ら進んで情報や資料を収集している」と「27. 目標に対し、実現のための具体的な行動を起こしている」はいずれも主体的にキャリア形成するために必要な要素であるためキャリアプランニング能力として考えられるであろう。一方、II 人間関係形成・社会形成能力因子は当初の項目だけで構成されている。これは、他者との関わりに重点が置かれている点で他の項目とは違いがあるためと思われる。「高等学校キャリア教育の手引き」(文部科学省, 2011)で、基礎的・汎用的能力を構成する4つの能力は、包括的概念であり、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にあると言及されていることから、本研究では一部の因子で十分な分類ができなかった部分があったと考える。

(2) 授業の効果について

今回、事前・事後のアンケートの結果、下位尺度のIII キャリアプランニング能力の得点が事前より事後に高まったことから、総学におけるキャリア教育に関する授業の実施前より実施後の方が、キャリアプランニング能力が向上したといえる。また、I 自己管理・課題対応能力とII 人間関係形成・社会形成能力についても事前より事後の得点が高いことから、これらの能力についても向上したといえる。

同窓会講演会後の感想文に書かれていた「社会に出るまでの経緯を聞いて有意義だった」「進路を決めていく中で自発的に調べたり積極的に何かをしたりすることの大切さを知った」という内容や、進路探求活動後の「たくさん活動していくことは大事だと思った」「計画すると物事がスムーズに進むと実感した」というリフレクションから、キャリアプランニングの体験的活動がIII キャリアプランニング能力の向上に影響したと考える。

I 自己管理・課題対応能力の向上については、進路探究活動のリフレクションにあった

「計画すると物事がスムーズに進むと実感した」という自己管理の有用性に対する気付きや、困難を乗り越えるスキルについての学習での「様々な問題について具体的に解決するための策を考えられるようになった」「課題を解決するには多くの方法があるとわかった」などの気付きが影響したと考えられる。

また、Ⅱ人間関係形成・社会形成能力の向上については、授業で行われたペアやグループワークでの話し合いにより、他者と自己の違いに気付いたり、他者の意見を聞くことが自己の広がりにつながると気付いたりしたこと、他者に伝わるように話すという経験を重ねたこと、体育館のクラス混合グループで初対面の相手ともコミュニケーションを図ったことなどが影響したと想定される。「グループ活動をスムーズに行えるように進行したり記録したりする力が身についた」「意見を出すことが得意になった」といったリフレクションからも、ペアやグループワークを繰り返すことの効果が大きいと考えられる。

進路探求活動はキャリアプランニング能力の向上を目指して実施した授業であり、困難を乗り越えるスキルの授業は、キャリアプランニングしていく上で目の前に表れた困難を乗り越える力が必要であることから実施したが、キャリアプランニング能力以外の能力の向上にも効果があることを見いだした。授業を実施した群としなかった群の比較はしていないため、授業のみが能力の向上に影響したとはいえないが、生徒のリフレクションに書かれている気付きや自己評価から、授業による効果も充分あったと考える。

(3) 今後の課題

①尺度の妥当性について

育成すべき能力を育成できたか測るためという観点では、各校の実情に応じた尺度の作成は必要であろう。今回作成した尺度では、信頼性はとれたが、妥当性を高めるためにはさらなる検討が必要であるといえる。

②構造化と実施計画について

今年度は2学年の総学におけるキャリア教育の構造化をもとに、実施計画を作成し授業実践することができた。構造化があったことで、段階的な目標を設け、実施計画の流れを作ることができた。今後は逆に実施したことをふまえて構造化の見直しも図りたいと考えている。また、指導案やワークシートについて学年会議で話し合い作成できたことと、授業中の生徒の見取りのために学年団教員に協力してもらえたことは、キャリア教育に対する組織的・協働的な取り組みに繋がる一歩であったと考える。来年度以降は、1・3学年について、総学のプログラムを計画・実施・評価し、3年間を通した総学の構造化を図りたい。

引用・参考文献

- 1) 青森県教育委員会 (2012) 「生きる・働く・学ぶをつなぐ青森県教育委員会キャリア教育の指針〈実践編〉」
- 2) 株式会社浜銀総合研究所 (2015) 「平成 26 年度文部科学省委託調査『高等学校普通科におけるキャリア教育の実践と生徒の変容の相関関係に関する調査研究』報告書」
- 3) 小泉令三 (2010) 「よくわかる生徒指導・キャリア教育」 ミネルヴァ書房
- 4) 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター (2016) 「再分析から見えるキャリア教育の可能性—将来のリスク対応や学習意欲、インターンシップ等を例として—」
- 5) 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター (2016) 「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」パンフレット—個々のキャリア発達を踏まえた“教師の”働きかけ—
- 6) 児美川孝一郎 (2013) 「キャリア教育のウソ」 ちくまプリマー新書
- 7) 中央教育審議会 (2011) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」
- 8) 福島創太 (2017) 「ゆとり世代はなぜ転職をくり返すのか?」 ちくま新書
- 9) 文部科学省 (2011) 「高等学校キャリア教育の手引き」
- 10) 渡辺三枝子・鹿嶋研之助・若松養亮 (2010) 「学校教育とキャリア教育の創造」 学文社